

ペンネーム	匿名希望
-------	------

【エピソードのタイトル】

前回下関は、何を教えてくれたのか？

【エピソードの内容】

このレースを初めて走ったのは、数年前の事だ。暑さが厳しくなった日だったと記憶している。初めての参加に、胸躍らせて、関東から下関に乗り込んだ。

ピンクのシャツを着た女性ランナーに出会ったのは、そのレースの途中、スタートしてまだ間もない、5k地点だった。右手には、穏やかな周防灘が見えていた。

お互い無言で走っていたのだが、気が付くと、同じペース、同じスピードで並走していた。今日は気持ちの良い日だ。気分も乗っている。折角だからと、声をかけてみた。彼女は微笑み、自己紹介をしながら、コースのことを解説してくれた。すでにこのコースを走破している。

「橋2つを超えていきます、橋の上から海を眺めると、まるで絵のようです」

「下関の良さが、いっぺんでわかります」

「後半の橋は、とってもきついです。前半はできるだけ我慢して、抑えてくださいね」

「長い坂道は、予想以上に足にきます」

「海の風は、今日は強いかな？」

「今日は暑いですね、お水しっかり取りましょう」

数々のアドバイスにうなずきながら、ラップタイムにより、k毎のタイムを調整していく。ランナーズハイの状態では走っているので、下り坂では、つい、スピード出過ぎで、思いがけぬ速いタイムで走ってしまった。

20kまでは、実に平穩・無事な、静かな道程だったのだ。

しかし、この平穩さは、後半すぐに、打ち砕かれた。トンネルの途中から、急な登りが始まった。

「さー、このコースは、ここから始まります。」彼女がオレンジの灯りの中から、澄んだ声で、声をかけてくれた。トンネルを抜けて前を見ると、だらだらの上り坂が、秋の日差しを浴びつつ、ランナーを呼び込んでいる。すでに多くのランナーが、過酷な後半の道へとすいこまれている。

それでも、往きの彦島大橋は2kの登りだった。いまだ、余力が十分に残っており、逆に下りはスピードに乗れて走っていた。異変を感じ始めたのは30k手前からだった。アップダウンの繰り返し、正確に刻んでいたと思っていたラップが、20秒、30秒と崩れ始める。そして、出島での折り返し。それでも、彼女とは、ほぼ同時だったのだが、その後は、先行したり、されたり、引っ張り合い、励ましあう形の走りとなったものの、自分のペースを守り事が精一杯だ。

ついに、33kからの長い登り。このコース最大の難所だろう。往路で感じたあの爽快感は、今はなく、ただただ、暑さと辛さに堪え忍ぶ展開になった。足が全く上がらない。手も思うように振れない。汗が噴き出し眼鏡を曇らせる。前後のランナーも、みんな辛そうだが、力を振絞って、この上りに果敢に挑戦している。頭には何も思い浮かばない、目の風景が、映像のスローモーションのようだ。走ることに集中し、黙々と走る。どの位

走ったのだろうか、ついに、目前に下りの坂がみえた。

36kからは、下り基調。それでも、スピードは、鈍い。上り坂で精力を使い果たしてしまっていた。

ラストの4kは、ほぼフラット、多くの下関市民の皆さんが出迎えてくれていた。街を挙げての声援に、声は出ないが心の中で感謝する。市街地に入ってきた。ビルの谷間をぬって、そして、念願のゴール。長いレースは終わった。タイムウォッチを押していると、彼女が、笑顔で出迎えてくれた。少し前にゴールしたそうだった。

予想以上に厳しいレースだった。今振り返り、今思い返す。

私は、前回のレースで何を学んだのだろうか？

下関は私に何を教えてくれたのか？

解は彼女の数々のアドバイスに含まれているのだろうか？

しかし、まだ、その答えは、今でも掴めていない。

でも、今度また、11月3日、再び挑戦する。その答えを手探りで手に入れるために。

そして、「自分のレースができた」と私自身が納得するために。。